

伊藤久三郎

1906 - 1977

伊藤久三郎は、戦前の二科会内に設立された前衛的な傾向の作家集団である九室会のメンバーです。当時、九室会には吉原治良、山口長男、斎藤義重といった日本の前衛絵画を代表する作家たちが揃い、伊藤久三郎は彼等と同等かそれ以上の評価を得ていました。しかし戦局の悪化を受け京都に帰ると、戦後は京都を出ることはなく中央画壇から忘れられてしまいました。

伊藤の画業は、大きく戦前のシュールレアリスム(超現実主義)的作風と、戦後の抽象的な作風に分けられます。特に晩年の10年間に到達した画境は、枕元にスケッチブックを置いておき、朝目覚めた時に夢のイメージを描きとめ、そのイメージを時間をかけて作品に仕上げていくという手法により制作するもので、誰にも真似のできない独創的なものです。

京都に生まれ、最初に日本画を学んだこの作家は、シュールレアリスムにしろ抽象にしろ、西洋の物真似ではない日本人独自の絵画表現となっています。



木立 1940 油彩・キャンバス



茸達 1933 油彩・キャンバス



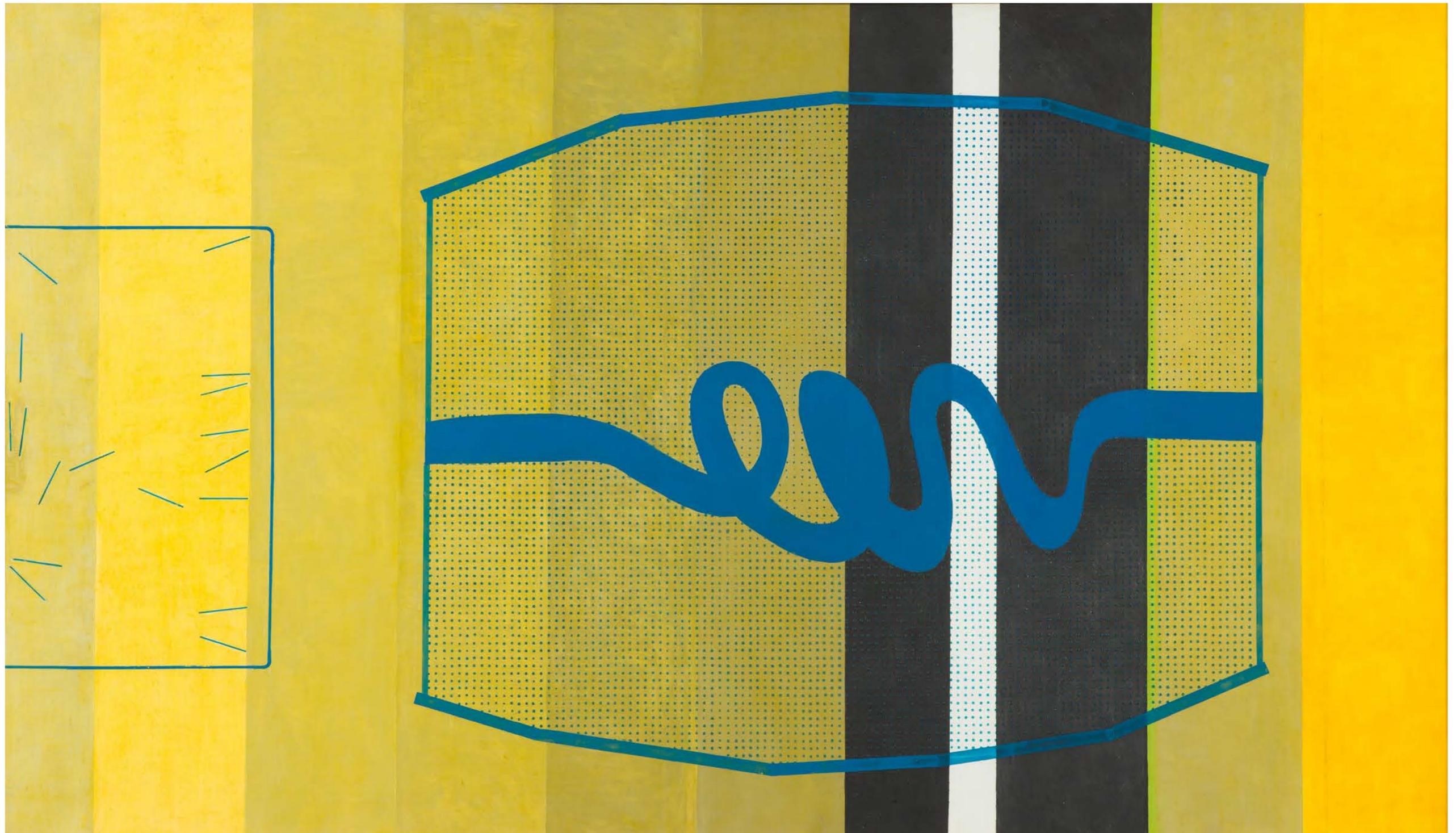
静物 1930-35 油彩・キャンバス



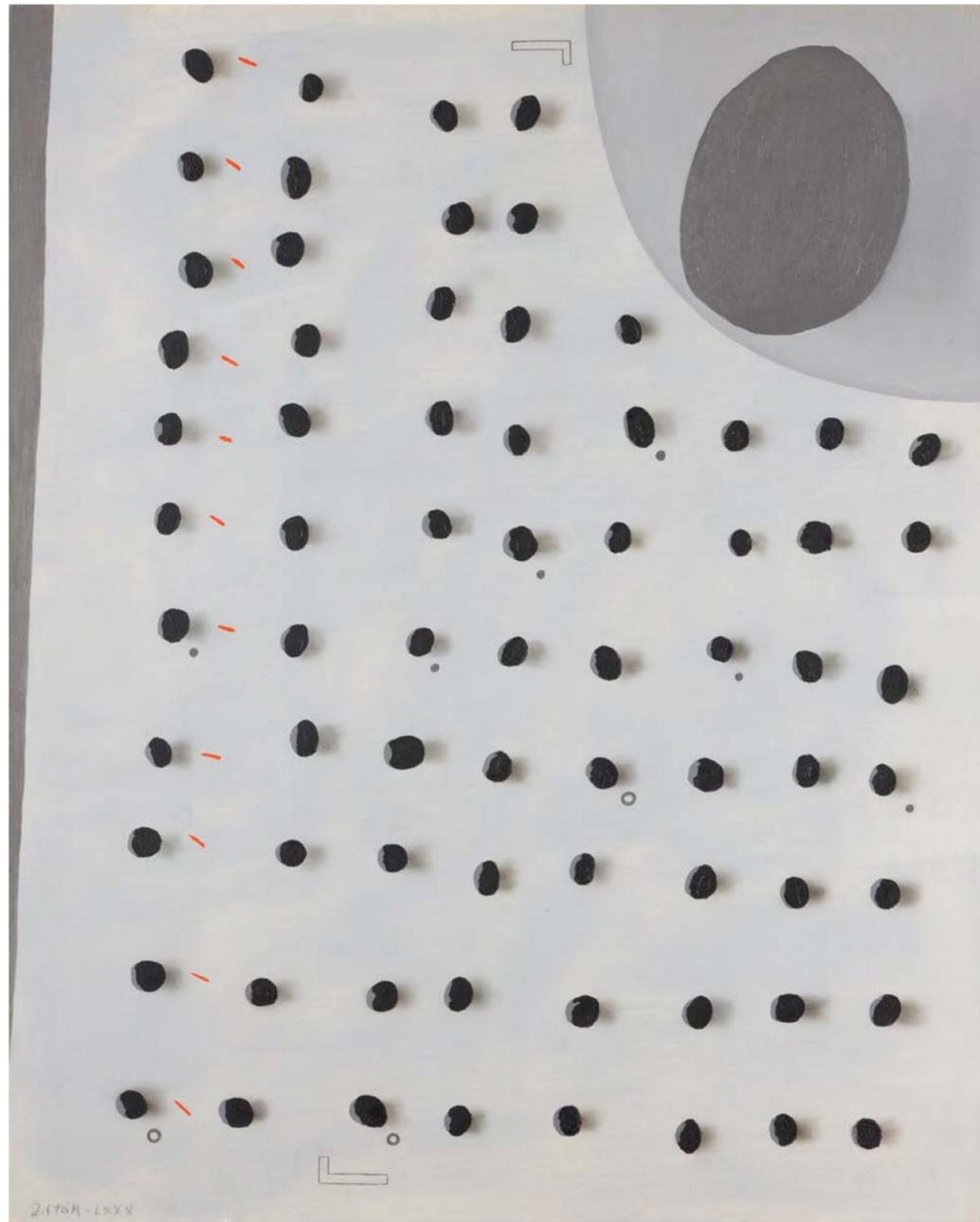
日蝕 1951 油彩・キャンバス



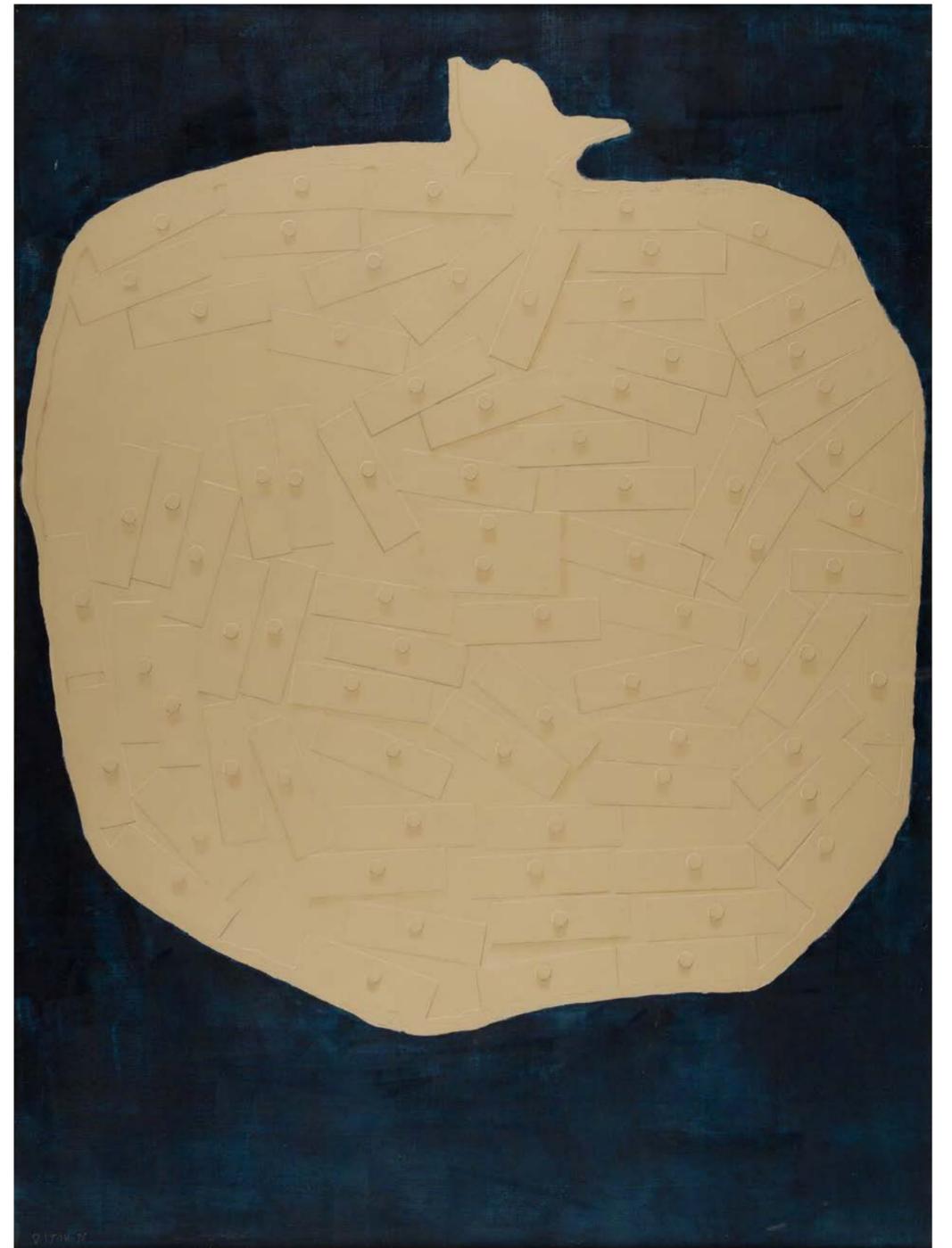
作80 1965 油彩・キャンバス



虫の2 1974 油彩・キャンバス



マメ 1975 油彩・キャンバス



ひきだし 1976 油彩・キャンバス



ゆらめき 1969 油彩・キャンバス



Atlas 1970 油彩・キャンバス